令和５年度　第３学年入学者選抜学力試験問題

一　般　科　目

# 国　語

## 注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまで，この問題用紙を開いてはいけません。
2　問題用紙は１０ページで，解答用紙は２ページあります。試験開始の合図があってから確かめなさい。
3　監督者の指示に従い，解答用紙の各ページに受験番号を算用数字で記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
4　文字などの印刷に不鮮明なところがあった場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。
5　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。ただし，「採点欄」「得点欄」に記入してはいけません。
6　問題用紙の余白は下書きとして利用してかまいません。
7　試験終了後，配付された問題用紙は持ち帰りなさい。

長岡技術科学大学

# 問題訂正（国語）

〈問題用紙〉

問題Ⅰ　問二

（誤）空欄 a ～ e に

（正）空欄 a ～ c 、 e に

---

（誤）1　しかし　2　また　3　他方

（正）1　しかし　~~2　また~~　3　他方

削除

※空欄 d に解答する必要はありません。

# 問題用紙（国語）

**Ⅰ** 次の文章は、小原克博「科学と良心の接点」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

なお、本文中の語句の右肩の＊は、文章の最後にある（注）の記号である。

科学と良心にどのような接点があるのだろうか。良心概念の来歴や多義性については後に紹介するが、科学との関係でいえば、良心は自己や集団に帰せられる責任の認識としてとらえるとき、その特性をもっともよく表現することができるだろう。

現代の科学技術は、ゲノム編集から核エネルギーの利用に至るまで、個人の人生や地球環境にジンダイ（ア）な影響をもたらすものが少なくない。［ a ］、科学技術の使用は社会的なリスクと常に連動しており、そこでは使用者個人の善意や悪意は限定的な役割しか果たさない。したがって、良心を考えるときにも、それを個人の内面に位置づけるだけでなく、良心に起因する責任の認識は社会に対し開かれたものでなければならない。そして、ゲノム編集や核エネルギーの利用に典型的に見られるように、現代科学技術がもたらす影響力の時間的長さを考慮すれば、二一世紀の良心は、未来世代への責任を引き受ける必要がある。

新型コロナウイルス感染症によって引き起こされた状況は、文字通り人類規模の危機となっている。人の善意や悪意は、このような状況下で、どれほどの意味をもつのか。そこで次に、疫病文学の代表作の一つ、アルベール・カミュ＊の『ペスト』（原著一九四七年）から重要な論点を抽出し、科学と良心の関係を考察するための手かがりとしたい。

カミュの『ペスト』は、ペスト拡大に伴って封鎖されたアルジェリア＊のオランという都市を舞台として、ペスト終息によって都市が開放されるまでの間の人びとの精神状況や生活を描いた架空の物語である。そこでは、ペスト蔓延（まんえん）という緊急事態において人間の心理や社会関係がどのように変化するのか、経済活動が停止したとき、どのような対応がなされるのか、などが具体的にかつチミツ（イ）に描かれながら、同時に、この世の不条理や、人の苦難や死に対する普遍的な問いが投げかけられている。

物語は二〇世紀半ばを想定しており、前世紀と比べるなら、ペストをはじめとする感染症に対する医学的知識や対処方法も格段に増している。とはいえ、医学が決定的な勝利をおさめることはない。主人公のリウーは医師であり、彼の献身的な治療の様子が作品中で描かれているが、その努力をあざ笑うかのように、蔓延するペストは次々と人の命を奪っていく。物語の中では「自宅への流刑」と呼ばれる外出ジシュク（ウ）政策が取られているが、それが命を保障してくれるわけではなかった。

圧倒的なペストの力を前に、それを「天罰」として論じるカトリック司祭パヌルーもいれば、できるかぎりの市民救済のために保健隊を結成したタルーもいる。その英雄的ともいえるタルーの善意に対し、この小説における「筆者」と称する人物が、冷静に次のように論評している点は注目に値する。

世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するものであり、善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる。人間は邪悪であるよりもむしろ善良であり、そして真実のところ、そのことは問題ではない。しかし、彼らは多少とも無知であり、そしてそれが

# 問題用紙（国語）

すなわち美徳あるいは悪徳と呼ばれるところのものなのであって、最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである。殺人者の魂は盲目なのであり、ありうるかぎりの明識なくしては、真の善良さも美しい愛も存在しない。

第一に、人間の行為を単純に善意と悪意に帰することの問題性が、ここで指摘されている。たとえ善意からなされた決断や行為であったとしても、それが「　X　」を欠いた場合、結果として「　Y　」をもたらすことがある。悪しき結果を避けるために必要なのは、必ずしも善意ではなく「無知」の認識であり、「　Z　」である。とりわけ危機的状況にあっては、正確な知識の有無が決定的となる。このことは、主人公リウーが、医学的な知識と経験に基づいて、淡々と職務に当たる理性的かつ実践的な人物として描かれている点にも関係している。

第二に、特定の人間の英雄的なふるまいが、必ずしも問題解決には至らないことが、ここでは示唆されている。端的にいえば、ヒロイズム*の否定である。危機的状況においては、英雄的なふるまいをする人、敵との「戦い」を力強く宣言する人に注目が集まり、その人があたかも問題の解決者であるかのように期待されることは、戦争の時代に限らず、これまで何度も繰り返されてきた。［　b　］、『ペスト』において描かれている、病人への対応や対策に関わるのは、ごくありふれた人びとであり、その人たちがささやかな形で善良さを行使している。こうした描写と対比的なのが「最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである」という言葉である。強制的な安楽死あるいは自殺幇助（ほうじょ）すら連想させる言葉であるが、「人を殺す」ことさえ正当化する知識が、科学の名の下に語られた時代があったことについては、後に事例を取りあげる。ここまでの論点から確認できる「良心」の働きを次に整理してみたい。A

日本語の日常的な語彙としての「良心」は、前述の「善意」に近い意味で用いられている。「良心」という日本語が英語の "conscience" の訳語として定着したのは一九世紀末のことである。当時、外来語に対応する適切な日本語が見当たらない場合、中国の古典から言葉を探すことが多かった。「良心」は『孟子』（告子章）から取られたことからもわかるように、儒教的な性善説*の系譜の中で理解される傾向が強かった。

［　c　］、英語の "conscience" にはギリシア思想に由来する長い系譜があり、西洋概念としての良心の語源的な意味は「共に知る」である。"conscience" の元になったのは、ラテン語の "conscientia（コンスキエンティア）" であり、"con（共に）" と "scire（知る）" から成り立っている。

西洋語の「良心」には語源のレベルでは「良い」「悪い」という価値判断が入っていない。その用語法は今も西洋語の「良心」に引き継がれている。カミュの『ペスト』における先の議論との関係でいうと、「知る」（スキエンティア）ことは、自らの「無知」の認識と表裏一体であり、「無知」であればこそ、「共に」知る（コンスキエンティア）ことを志向することになる。そして、善意や悪意とは独立した「　Z

# 問題用紙（国語）

」が目標とされるのである。

「科学」という日本語は、一八八〇年代初頭、西周*が"science"に与えた訳語であるが、サイエンスはラテン語のスキエンティアに由来している。西は、当時日本に流れ込んできた西洋の諸学（discipline）が、非常に専門分化していることに新鮮な驚きを感じ、"science"に「分科の学」（ばらばらに分かれている学問）という訳語を与えた。これは確かに当時の"science"の形式的側面をとらえているが、それがスキエンティア（知ること）に由来するというニュアンスは日本語の「科学」からは理解することができない。"con-science（良心）"は「共に知る」ことであり、言葉の本来の意味で「共にサイエンスすること」であるとすれば、少なくとも語義レベルでは、科学と良心が密接な関係にあることがわかるだろう。自らの行為を安易に正当化することなく、［ d ］、英雄的に善意を強弁することなく、理性的かつ実践的に共通の「知」に開かれていくことに、コンスキエンティアの働きを見出すことができるのである。［ e ］、歴史的な出来事の中で、科学と良心はどのような関係をもっていたのだろうか。

ナチス時代、人種優生政策のもとで六〇〇万人ものユダヤ人だけでなく、二〇万人にものぼる障がい者もマッサツされた。ドイツ民族の遺伝形質の劣化を防ぐため、というのが、その理由である。その計画の中で重要な役割を果たした人物の一人、人類遺伝学者のオトマール・フォン・フェアシュアー（一八九六～一九六九）に関して、近年、多くの事実が明らかになってきた。ここで経緯の詳細について述べることはできないが、彼は断種法（遺伝病患者などに強制不妊手術を施すため、一九三三年に制定された法律）や人種差別的な政策を科学の立場から正当化した。彼の理解では、強制不妊手術は、病気や障がいのない、よりよい世界をつくるために必要なことであり、きわめて人道的な行為であった。彼は科学者としての良心を発揮して、社会の改良に励んだといえる。そして、そうした優生学的な理想は彼特有のものではなく、当時、日本を含む、多くの国々で共有されていた先進的な価値観でもあった。

なぜフェアシュアーの良心は「疚しさ」も「葛藤」も感じることなく、自己完結・自己正当化し、大量殺戮に加担してしまったのだろうか。松原洋一の次の説明は、当時の科学が陥った問題構造を的確に説明しているだけでなく、研究不正など、現代における問題をも示唆しているようで興味深い。

> 科学者がいろいろなことを証明していくためには、大きなスポンサーが必要です。そこにナチスという〝理解者〟が現れ、自分のやりたいことを全部支援してくれて、弟子のメンゲレをはじめ、同じようなことを考える人ばかりが周囲に固まって共犯関係が確立する。そこで名声を得て、権力者たちがオスミつきを与えてくれるという状況になれば、科学者が良心を保つのは非常に難しくなるでしょう。

「共に知る」範囲を狭く設定することによって、科学はその専門性を増すことができる。しかし同時に、自らに都合良く「共に知る」範囲を限定することにより陥る陥穽についても歴史的教訓から批判的に学び、B社会的良心の維持・活性化に努める必要があるだろう。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

# 問題用紙（国語）

（注）○アルベール・カミュ＝（一九一三～一九六〇）。フランスの作家。○アルジェリア＝アフリカ北西部、地中海岸の国。フランスの旧植民地。一九六二年に独立。○ヒロイズム＝英雄主義。英雄を崇拝し、または英雄的行動を好む心情。○性善説＝人が持って生まれた性質は善だとする説。○西周＝（一八二九～一八九七）。啓蒙思想家。○優生学＝人類の遺伝的素質を改善することを目的とし、悪質の遺伝形質を淘汰し、優良なものを保存することを研究する学問。○松原洋一＝人類遺伝学者。前国立成育医療研究センター研究所長。○メンゲレ＝ヨーゼフ・メンゲレ（一九一一～一九七九）。ドイツの医師、人類学者。

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書でていねいに書くこと）。

問二　空欄 a ～ e に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ（一つの語は一つの箇所にしか入らない）。

1　しかし　2　また　3　他方　4　つまり　5　では

問三　空欄「　X　」～「　Z　」に入れるのに最も適当な語句を、『ペスト』の引用文中からそれぞれ抜き出して答えよ。Xは五字、Yは一三字、Zは一〇字の語句である。

問四　傍線部A「『良心』の働き」の説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　日本語の「良心」は『ペスト』に描かれた「善意」に近い意味で用いられている。これに対し、西洋語の「良心」の語源は「共に知る」であり、そこには「良い」「悪い」という価値判断が入っていない。したがって、結果の良し悪しは考えずに「共に知る」ということが「良心」の働きである。

2　カミュの『ペスト』によれば、悪しき結果を避けるために必要なのは「無知」の認識であり、それは「知る」（スキエンティア）ことと表裏一体である。自らの「無知」を認識して「共に」知る（コンスキエンティア）ことを志向する、これが「良心」の働きである。

3　日本語の「科学」は"science"に「分科の学」という意味をあてた訳語であった。ここからはサイエンスがラテン語のスキエンティア（知ること）に由来するというニュアンスを理解することができない。ゆえに「共に知ること」である"con-science（良心）"の働きは「善意」とされた。

4　英雄的なふるまいは、「自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳」「最も救いのない悪徳」の現れであることがある。危機的状況でむしろ必要なのは、理性的かつ実践的に共通の「知」に開かれていくという、ごくありふれた人々の良心の働きである。

# 問題用紙（国語）

5　"con-science（良心）" は語義レベルでは「共にサイエンスすること」であり、科学と良心には密接な関係がある。良心の働きとは、自らの行為を安易に正当化することなく、また、英雄的に善意を強弁することなく、善意や悪意から独立して "science" に携わることである。

問五　傍線部B「社会的良心の維持・活性化」とはどういうことか。本文中の語句を用いて五〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

問六　次の1～5について、本文の内容に合致するものには〇、合致しないものには×をつけよ。

1　『ペスト』では、英雄的ともいえるタルーの善意に対して、特定の人間の英雄的ふるまいが必ずしも問題を解決しないということが示唆される。病人への対応や対策は、ごくありふれた人びとのささやかな形での善良さの行使として描かれ、人びとの正確な知識がそれを可能としている。

2　『ペスト』のリウーは、医学的な知識と経験に基づいて、淡々と職務に当たる理性的かつ実践的な人物である。だが、その献身的治療にも関わらず、ペストは次々と人の命を奪っていく。これは、行為の結果が、善意によるか悪意によるかにかかわらず生じるということを示している。

3　ペストが蔓延するような危機的な状況下では正確な知識の有無が決定的である。善意から発する英雄的ふるまいも、ささやかな形での善良さの行使も、無知であるならば良い結果をもたらさないことがある。『ペスト』の登場人物や「筆者」と称する人物の論評には、このことが示されている。

4　人類遺伝学者のフェアシュアーにとって、強制不妊手術は病気や障がいのない、よりよい世界をつくるために必要なことであり、人道的な行為であった。彼は科学者としての良心を発揮して、社会の改良に励んだといえる。その良心は「疚しさ」「葛藤」を感じずに自己完結・自己正当化をしていた。

5　良心の働きは誰にでもあるが、それを個人の内面に位置づけるだけでは、現代の科学技術からの要請に応えるものにはならない。"con-science（良心）" は「共に知る」ことであり、その範囲を狭く限定することによって、科学技術はその専門性を増すことができるのである。

（以下余白）

# 問題用紙（国語）

**Ⅱ** 次の文章は、小島康敬「『礼』と型」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の〈白文〉は出題者が挿入したものである。また、語句の右肩の＊は、文章の最後にある（注）の記号である。

では、どうすれば礼楽を身体知化（「礼楽諸を身に得る」）することができるのか。＊徂徠は「倣傚」（模倣）こそが学びの初めであり、基本であると説く。「礼楽」は美しい。人は美しいものを真似ようとする。「＊聖人」はそうした人の模倣ショウドウを見抜いて、「礼楽」を制作し、その美しい範型の力によって知らず識らず内に内面を感化せんとしたのである。「礼楽」が指し示す範型に理屈を超えて盲従し、これを「＊倣效」せよ。「孔子、拱するに（両手を胸の前で重ね合わせること）、右を尚にすれば、則ち門人も亦た拱するに右を尚に」した。孔子はこれを「学を嗜む」ものといった。書を習う者は必ず手本に＊王羲之の『蘭亭序』『黄庭経』を「模する」が、それは「贋」を作ろうと思っての事ではない。「学の道」とは元々そういうものだからである。

書や絵画においても、個性的な書や独特の絵を最初から描けるわけではない。それは地道な模写やデッサンといった技術技法習得の過程を通してこそ可能となるものである。「＊格に入りて格より出でて初めて自在を得べし」（松尾芭蕉『＊祖翁口訣』）という言葉に示されるように、創造性は伝統的な様式へのケンキョな学びの修錬があってこそ開花される。

A 徂徠における礼楽の学びにもそのような意味での模倣の重要性が語られている。学習の最初の段階において「剽窃模擬」と言われようとそれで結構である、と徂徠は言う。手本通りに真似ること「久しく」すれば、手本の型に自ずと「化」せられて、「外」の型が「我と一」になってくる。「故に模擬を病とする者は、学の道を知らざる者なり」である。

このように徂徠は手本の型を自分の身体に刷り込み内面化してゆく為の方法として、模倣の意義を自覚化させた。

模倣は反復され習慣化されなければ意味をなさない。そこで徂徠が模倣と同時に強調するのが「習」「習熟」である。徂徠は『＊訳文筌蹄』で「習」の字義を「フダンニ手ナルルコトナリ。……学習ハヘン（回数）ヲカサネナラヒ熟スルナリ」と語釈している。また「慣」の字義を「シナレテナルルコトナリ。習字ト同義ナリ」と語釈している。つまり、徂徠は「習う」とは、「慣れる」ことであると解している。論語冒頭の「＊学而時習之」の「習い」にしても、徂徠は学んだことを時々おさらいするといった解釈を超えて、常に「身を以て＊先王の教へに処」き、それに慣れ親しみ、習慣化することだと解している。「身」を「先王の教へに」馴致させ、経験の成熟（「知自然に明らかなり」）を待つ一連の過程が「習」であった。

このような「習」を介してこそ、言葉の論理の彼方に無限に広がる「物」、すなわち「先王」によって「教への条件」として提示された具体的な範型（「礼楽」）を「我が身」にまねきよせ、「我が有」と為すことができる。「習ふこと久しふ」して後に、自分の外に広がる「物」はおのずと来たり至り、「我が有」となる、それがB徂徠一流の「格物致知」の解釈である。

# 問題用紙（国語）

その事に習ふことこれ久しうして、守る所の者成る。これ「物格る」と謂ふ。その始めて教へを受くるに方りて、物はなほ我に有せず、これを彼に在りて来らざるに辟ふ。その成るに及んで、物は我が有となる。これを彼より来り至るに辟ふ。その力むるを容れざるを謂ふなり。故に「物格る」と曰ふ。「格」なる者は「来」なり。教への条件我に得れば、すなはち知自然に明らかなり。これ「知至る」と謂ふ。また力むるを容れざるを謂ふなり。

「格物」を朱子*は「物に格る」と読んで物事の理を究めることと解し、王陽明*は「物を格す」と読んで物事を正しくすることと解した。これに対して徂徠は「物格る」という独自の読み方をしている。この徂徠の読み方は注目に値する。学習の初めの段階においては「物はなほ我に有せず」、即ち「物」は自分の「身」についていない。しかし「習ふことの熟してしかるのちに我が有となる」、すなわち習熟の果てにやがて外にある学びの対象は自己の身体に内在化される。それはあたかも「物」が自ずと向こうの方からこちらにやってくるのに譬えられる。それが「物格る」である。学習すべき外の「物」が身体に内在化されると、新たな知の開けが「自然」にオトズ(ウ)れてくるが、それを「知至る」、というのである。

大学*のいはゆる格物なる者は、またその事に習ひてこれに熟し（〈白文〉習其事而熟之(a)）、自然に、得る所ありてしかるのち知の生ずるを謂ふのみ。

以上のように、徂徠は「礼楽」を学ぶ過程における「倣效」と「習」の重要性を説いた。「大なるかな習ひや。人の天に勝つ(b)者はこれのみ」と徂徠は言う。先王の礼楽が指し示す範型を模倣し、「習ふことの久しう(c)」すれば、やがて「習慣、天性のごとく(d)なる」。すなわち、習慣は第二の自然を形成する。徂徠は習慣のこうした力を極めて重視した。しかし、習慣は一方で我々の能力を高めもするが、他方では精神の慢性化をも招こう。徂徠は習慣の惰性化が「膠固*の習」「習弊」となることにも気づいていた。それ故に礼楽を漫然と学び習うのではなく、礼楽に込められた意義を主体的に「思ふ」ことを強調している。

学問の道は、思ふことを貴しとなすなり。……孟子*曰く、「心の官はすなはち思ふ」と。これ人の人たる所以も、またその能く思ふを以てのみ。後儒の、深遠の思ひなき、すなはち三思を以て大いに過ぐとなす。妄なるかな。

引用文中の「三思を以て大いに過ぐとなす」云々は、『論語』公冶長篇の「季文子、三たび思ふて、而る後に行なう。子、之れを聞きて、曰く、再びせば斯れ可なり」を踏まえたものである。この箇所を朱子は「君子は窮理を務めて果断を貴ぶ。徒づらに多く思ふことを尚しと為さず」（『論語集註*』）と解した。これに対して徂徠は真っ向から異説を唱える。「思ふ」ことを尊重する孔子が三度思うことを思い過ぎだなどと言うはずがなく、ここは「季文子は三度も考えられるような人物ではなく、せいぜい二度考えればよいほうである」と孔子が述べたものと解する。そして「事の小にして近きは、思はずといへども可なり。大にして遠きは、千百思すといへども可なり。何ぞ必ずしも再三することか之れ有らん」と言葉を足す。この解釈に示されるように、C徂徠は思索を重視し、自らにもまた門弟にもこれを課した。

「礼楽の教へ」は人をして「思ふ」ことを促すとして、徂徠は次のように言う。

# 問題用紙（国語）

それ人は、言へばすなはち喩る。言はざればすなはち喩らず。礼楽は言はざるに、何を以て言語の人を教ふるに勝れるや。化するが故なり。習ひて以てこれに熟するときは、いまだ喩らずといへども、その心志身体、すでに潜かにこれと化す。ついに喩らざらんや。かつ言ひて喩すは、人以てその義これに止るとなし、またその余を思はざるなり。これその害は、人をして思はざらしむるに在るのみ。礼楽は言はざれば、思はざれば喩らず。それ或いは思ふといへども喩らざるや、またこれを如何ともすることなければ、すなわち旁く它の礼を学ぶ。学ぶことの博き、彼是の切劘する所、自然に、以て喩ることあり。

D ここには徂徠の行き届いた思索が見られる。言語による説教よりは、「礼楽」による感化の方が勝る。なぜなら礼楽を「習ひて以てこれに熟するときは」言語的理解の次元を超えて身体がすでに了解しているからである。また言語での指示は、明示的であるが故に人をしてその言葉が指し示すこと以外のことを考えさせないという弊害がある。これに対して、「礼楽」は何も語ってくれないので、その意味する所を自らがあれこれと思慮しなければならない。つまり「不言の教へ」である「礼楽」は人に思惟することの自発性を促す。思惟してなお分からなければ、他の礼を広く学び、学んでは思い、思っては学びと、「学」と「思」との絶えざる往復過程のうちに、自然と悟るようになる、というのである。「学問の道は、そのみづから喩らんことを欲す」。

ここに見られるような学びの姿は、手取り足取り教えることを良しとする昨今のサービスカジョウ（エ）の教育ではない。それは能、歌舞伎といった伝統芸能の世界や職人の世界でかつてはよく見られた不親切な（？）教育――そこでは師匠は何も教えず、弟子は師匠の芸や技を見よう見まねで盗み取ることが期待されている――にツウテイ（オ）するものがあろう。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注）○礼楽＝行いをつつしませる礼儀と心をやわらげる音楽。儒教では、社会の秩序を保ち、人心を感化する働きをするとして尊重した。　○身体知化＝身につけること。体得すること。　○徂徠＝荻生徂徠（一六六六～一七二八）。江戸中期の儒学者。　○聖人＝知徳が最もすぐれ、万人が仰ぎ崇拝する人。ここでは、徳をもって天下を治めた古代の理想的帝王の堯・舜などを指す。　○倣效＝倣傚に同じ。　○王羲之＝（三〇七？～三六五？）。中国古代、東晋の国の書家。『蘭亭序』『黄庭経』はその作品。　○格＝きまり。やり方。　○『祖翁口訣』＝芭蕉作とされる俳論書。作者未詳。　○『訳文筌蹄』＝徂徠作の語学書。　○学而時習之＝「学びて時にこれを習ふ」と訓読する。　○先王＝昔の聖王。これも堯・舜などを指す。　○朱子＝朱熹（一一三〇～一二〇〇）の敬称。中国の宋代に確立した新しい儒学の大成者。　○王陽明＝（一四七二～一五二八）。中国の明の儒者・政治家。朱子学を批判して、陽明学を開いた。　○大学＝儒教の経書。　○膠固＝凝り固まって融通がきかないこと。　○心の官＝心という器官。　○後儒＝後世の儒学者。　○『論語集註』＝朱熹による『論語』の注釈書。

# 問題用紙（国語）

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書（かいしょ）でていねいに書くこと）。

問二　傍線部Aについて。「礼楽の学び」に「模倣」はどのような意味で「重要」なのか。本文中の語句を用いて四〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

問三　傍線部B「徂徠一流の『格物致知』の解釈」を、本文中の語句を用いて四五字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で述べよ。

問四

①　本文中の訓読に従い、波線部aの白文に返り点・送りがなを付けよ（送りがなはカタカナで記せ）。なお、解答用紙の白文には一部ふりがなを付けた。

②　波線部b「勝つ」、c「久しう」、d「ごとく」の文法的説明として、次表の空欄1～7に入れるのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ選択肢を何度用いてもよい）。

| 語 | 品詞 | 活用形 | 意味 |
|---|---|---|---|
| 勝つ | 1 | 2 | |
| 久しう | 3 | 4 | |
| ごとく | 5 | 6 | 7 |

〈品詞〉ア　名詞　イ　動詞　ウ　形容詞　エ　形容動詞　オ　副詞　カ　連体詞
キ　接続詞　ク　感動詞　ケ　助動詞　コ　助詞

〈活用形〉サ　未然形　シ　連用形　ス　終止形　セ　連体形　ソ　已然形　タ　命令形

〈意味〉チ　自発　ツ　打消　テ　推量　ト　受身　ナ　尊敬
ニ　完了　ヌ　断定　ネ　比況　ノ　使役　ハ　可能

③　波線部dを含む「習慣、天性のごとくなる」を口語訳せよ。

（以下余白）

# 問題用紙（国語）

問五　傍線部C「徂徠」が「思索を重視」したのはなぜか。その説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　礼楽を学習し、それに慣れていくにしたがって、我々は礼楽について考えることをしなくなる。このような惰性化の弊害を避け、礼楽をより深く理解してゆくためである。

2　長い時間をかけて礼楽に慣れていくと、それはその人の第二の自然を形成する。習慣のこのような力を理解し、礼楽に習熟することの重要性を自覚するためである。

3　礼楽は知ろうとするのではなく、模倣して身につけることが大事である。このように礼楽に慣れ親しむ経験を積み重ねることによって、礼楽の意義を理解できるようになるためである。

4　礼楽が習慣として身についてくると、我々はただ漫然とそれを繰り返すようになる。このように習慣となった礼楽が意味も分からずただ繰り返すだけのものとなることを防ぐためである。

5　礼楽を模倣してそれに習熟してゆくと、その範型の意味するものも次第に分かるようになる。このようにして理解したことを意識しながら、将来にわたって礼楽を実践するためである。

問六　傍線部D「ここには徂徠の行き届いた思索が見られる」とあるが、その「思索」の内容として適当でないものを、次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　人に言葉で教えられるよりも自ら礼楽に習熟することの方が勝っている。なぜなら、人は習熟によって礼楽に感化され、言語的理解の次元を超えて、礼楽を身体で了解するからである。

2　言葉で人に教えるということには、言語が明示的であるがゆえに、その言葉が指し示すものだけを理解させ、それ以外のことを人に考えさせないという弊害がある。

3　礼楽は何も語ってくれないので、人はその意味するところを自らあれこれ考えなければならない。そうしなければ理解することができず、礼楽はこのように思惟することの自発性を促す。

4　自ら思惟して分からなければしかたない。さらに広く他の礼を学び、学んでは思い、思っては学びと、学ぶことと考えることとを絶えず繰り返す。そこから、自ずと分かることがある。

5　礼楽は人に教えられて学んでゆくものではない。自ら礼楽を模倣し、それに習熟してゆくものである。礼楽への理解はこうして礼楽に感化されることで、自己の身体を通じて深まるのである。

（以下余白）